九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

生物学と政治学II

杣，正夫
九州大学法学部教授

https://doi.org/10.15017/1713

出版情報：法政研究. 43 (1), pp.25-69, 1976-06-20. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

生物学と政治学　Ⅱ

杣　正夫

はじめに
一　生物学的人間の登場
寓話……アリストテレス……トマス・アクィナス……ルネッサンス……ホッブス……ジョン・ロック……マルサス……モーガン……エンゲルス……ダーウィン
二　ヒトと動物の連続性
ヒトの文化性と自然性……狩猟と採集の原始社会……感覚とコミュニケーション……生殖……攻撃行動……暗黙の思考　（以上、四二巻二―三合併号）
三　自然と文化
文化の意味……文化の形成……文化の自然的基礎……派生的要求と文化反応……文化の評価……自然律と文化律……文化の発展……都市と文化……最適密度……国家の成立……古代都市の没落
四　政治学の課題
行動科学の衝撃……心理学的要因……政治システムの環境……個人主義……政治の後発性……政治文化……政治の社会状態への依存……政治制度の状況化……政治行動認識の根拠として……政治行動の価値基準として　（以上、本号）

三　自然と文化

《文化の意味》

人類は他の動物と同じく自然の環境に支配されて生存し、生活している。人類の主人である自然は二通りに分けてとらえるのが便宜である。長期的に支配を実現する「大自然」と不断に影響を及ぼしている「小自然」とがこれである。大自然の法則に従えば人類は始めあって終りあるものである。人類の種もかつて地球上を横行していた恐竜が絶滅したと同じく、何万年か後にはその生存が絶たれることであろう。この大自然の過程は自己の中に秩序形成作用をもっている有機的自然の無秩序化としての無機的な自然への移行や、より現実的にはエネルギー資源の減少において認めることができよう。これに対し小自然はわれわれが日常的に接する自然である。この自然は生物学的人間として人間の内にあって要求衝動を生み出し、他方、外側から人間生活を規制する条件としてはたらく。人間はその要求をもって自然にはたらきかけ、自然に適応して生活様式を形成する。このような自然に対して形成される生活様式の総体が文化である。したがって文化の概念は、〝小〟自然の自然に対置されるものである。

文化概念　文化の古典的な定義はタイラー（Edward B. Tylor）によって与えられた。それは「知識、信仰、技芸、道徳、慣習およびその他の能力習慣で、社会の成員としての人間が獲得したものを含む複合体」[1]である。かれは文化を主として制度的側面でとらえ、その外形的存在に準拠して人類文化の比較考察の視点をすえた。文化は社会を基盤として歴史的に形成され、制度として定着し、そのことによって人間行動に対して規範性をもつのである。

タイラーののち文化観は比較文化研究の発達にともなって自然と社会の環境に対する人間行動の心理的契機が高く評価され、また文化の機能性に焦点をおいてとらえられるなど行動科学的な文化概念の機能主義的把握に深められて

きた。

マリノウスキー（Bronislaw Kaspar Malinowsky, 1884～1942）は文化の機能主義的理解に大きく貢献した。かれによれば文化は「本質的には、人間がその要求を充足する過程において環境の中で直面する具体的な特殊的な諸問題をよりよく処理できるようにする手段的装置である。」[2] と見られた。そうしてこの要求は基本的には生物学的、自然的人間の要求に関連づけられるものである。文化はこうして要求充足の機能的な反応様式の体系としてとらえられる。マリノウスキーはこの文化の機能主義的把握から文化を定義して、「道具、消費財、種々の社会集団の憲章、観念・技術・信念・慣習からなる統合的全体」[3] とする。かれはさらに文化を構成要素で類別して物的存在としての物質と人間行動にかかわるものとしての慣習と精神的なものとしての観念に区別した。現在では文化概念は信条、価値観、情緒形態を標識にしてとらえられた行動の精神的要素に傾斜して理解されている。

≪文化の形成≫

人間は自分でつくり出した文化をもつ唯一の動物であるといわれる。人間の文化的特性は言語の使用にもっともよく示されている。言語によって人間は認識対象を抽象化し、概念化する能力をもち、この能力にもとづいて自然を支配する技術を発達させ、積極的に人為的に加工された第二次環境をつくり出してきた。これに対し野生の動物は自然淘汰を通して主として遺伝的な適応によりいわば受身の形で生態的な地位を占めて進化してきたものである。こうして人間の文化的営為は人間に他の野生動物に対してきわだった特性をもたせることになった。

人間のこの特性は進化的に見ると霊長類のヒトの祖先が猿人として直立したときからはじまった。直立猿人は直立することによって手を解放した。その手は道具をつかい、道具をつくる手となった。道具をつかい、言葉をもつことで中枢神経は発達した。そうして重量を増した頭脳部は直立した背骨で支えられることができた。火を発明すること

でヒトは自然のエネルギー系を自己の生活力に加えることができた。言葉の発達はヒトの情報系を超有機体的なものに形成させた。人類の文明は物質系とエネルギー系と情報系の三システムでとらえられるが、それで見た文明はきわめて高度な段階に達したのである。

動物は一般に野生の動物と家畜に区別できる。ヒトはそのどちらに属するであろうか。動物が家畜とされる条件は三つある。栄養と生殖が人間によってコントロールされ、さらに自然の脅威から人為的に守られていることがこれである。この観点からするとヒトの生存状態は家畜化されたそれである。ヒトは自己を家畜化した動物（a self-domesticated animal）である。ヒトは自然の動物である自己を人為的に加工した動物である。こうしてヒトは文化的動物であり、文化的自律性を備えた動物であるのである。ヒトは野性動物である霊長類の一種を原質として文化的可塑体として造型されたものといえるであろう。

≪文化の自然的基礎≫

人間の文化は生物学的人間の自然性に加工したものであり、その意味で両者は距離をもち、対照を形成する。しかし内面的に見ると文化は基本的には生物学的人間の自然環境に対する人間特有の適応様式であるので、それは生物学的人間の自然性と密接に関連している。マリノウスキーの機能主義的な文化観はこの関連を明確にした。

人間は有機的個体として身体をもち、その有機的必要を充足しなければならない。人間をとりまく環境はかれの仕事の素材を提供する反面、危険な敵やその他有害な力が存在し、それに対して人間は自己を守らねばならない。

人間は個体の生存、種の存続、有機体全体の活動維持がなされるに必要な基礎条件を備えねばならない。さらに人間は製作品の全装備とそれを生産し、評価する能力とからなる二次的環境をつくり出す。

マリノウスキーにとって人間性とは、呼吸・睡眠・休息・栄養摂取・排泄・生殖というような身体的機能の遂行を

命ずる生物学的決定作用を意味した。また基本的要求とは「個人および集団の存続のために充足されねばならない環境的・生物学的条件」である。[4] 人間の生命活動はこの基本的要求の充足に至る過程からなっている。この生命活動は衝動から発し、行為に移り、満足をもって終る系列をなす。[5]

衝動・行為・満足の三局面からなるこれら生命活動系列は野蛮・開化の区別なくいかなる文化にも生起し、それぞれの局面の生理学的な最小限度の性質は恒久不変であり、三局面の経過も恒久不変である。[6]

生命活動系列の局面は文化的装置の中で変容をうけて生起する。衝動は伝統によってつくり直される。飢えや食欲は文化的に決定されてくる。何がおいしいか、食べてもよいか、あるいは食べなければならないかの評価と制限、食物の質・材料・調理に関する呪術的・宗教的・衛生的・社会的タブー、食欲のおこる時間と食欲のタイプをきめる食事のしきたりなどに未開文化はもとより、現代の多様な文化はそれぞれ特有の決定様式をもっている。性欲・疲労・眠気・渇き・運動衝動などすべての衝動について三つの局面があきらかに文化要因によって限定され、確定されている。

「要するに、最も単純な生理的活動をひきおこす衝動でさえも、生理的必要によって決定されているがゆえに、結局おさえがたいと同時に、高度に可塑的であって、伝統によって決定されているという事実を無視しえないであろう。」[7] 文化の状態においては単なる生理的衝動というものは存在しえないのである。文化条件のもとでは生命活動系列は個人や組織集団や伝統的な価値・規範・信念の関連の中で展開する。したがって要求の概念は文化要因を含んだものに変わる。すなわち要求は「人間有機体と文化装置における、またこの両者と自然環境の関係における条件であって、集団と有機体の存続に必要にして十分な諸条件の体系のことである。」[8]

要求は文化的反応として示される。有機体はそれぞれの要求の領分において特殊な習慣が形成されるようにみずか

らを適応せしめる。そして文化的反応が組織されて、このきまりきった習慣は組織的・常習的な仕方で充足される。種々な文化的反応は広い社会的関連のすそ野をもって構成される。栄養財・物品・衣服・建築材料・建造物・武器・道具等の製作品の供給を絶やさないためには、「文化は単に製作品をつくり出すだけでなく、技術、つまり規制された身体的運動や価値や社会組織の諸形式を発展せしめなければならない。」[9]

基本的要求の一つである生殖の文化的反応は求愛から始まって親族関係を形成する全過程である。求愛に関する多様な制度を各文化はもっている。若衆宿・娘宿といった物的施設もある。婚礼・婚姻という「人間生活のうちで最も私的なこの局面でさえも、直接に社会的関心事となり、その様式の大部分が慣習・法・人的組織・倫理・宗教的信仰との関連において伝統的に規定されている。」[10] 婚姻関係は親子関係に転化し、親族関係に至る。生殖の要求の文化的反応の全容は一連の生命活動系列の生物学的決定原因を中核にして、強力な不可抗的な文化的決定作用をもった経済的・教育的・法的・政治的決定の諸要素から成り立っている。われわれは高遠な自由と秩序の理念を生み出す基盤をこの基本的要求の文化的反応過程に見出すであろう。

《派生的要求と文化反応》

マリノウスキーは基本的要求の文化的反応過程の中から二次的・派生的要求とその文化反応を分離し、そこに人間文化の形成される本質的過程を認めた。

人は自然の脅威から生存を守るとき、あるいは自然にはたらきかけていくとき、有機体の個体として自然から与えられている以上の能力を発揮する。文化が人間に対して動物が自然からうけているものをこえた派生的な可能性・能力を与えた。しかし「人間の行為の領域が動物としての人間のもつ先天的な能力をはるかにこえてはなはだしく拡大したために、人間に多くの制限が課せられるに至った。」[11] 文化は人間の行動に新しい型の特殊な決定作用を及ぼした。

人間は環境を自己のためにたえず開発利用する。その代りに、人間は自分の行動をさらに立ち入って決定されるという代価を支払わねばならなくなったのである。ここに経済、知識、教育、法、道徳、宗教、芸術等に対する派生的要求が生まれ、人間はそれを文化的至上命令として基本的要求にひとしく充足しなければならなくなった。(12)

人間の生存にとっても派生的要求の充足は絶対の要請であって、それは生物学的な生命活動系列のそれと同様である。かわきを癒すために人は水を飲まねばならない。これは生命活動系列の一部である。水道を施設することは人間の自然から直接くる生物学的要求ではなくて、ここにいう派生的要求である。しかし今日の都市生活では人間は水道の施設から水の供給をうけないではかわきを癒すことはできない。それゆえ水道を施設するという派生的要求を充足することは人間にとって絶対的な命令性をもつに至るのである。人間が環境に適応する能力を高めるために、一たんある工夫を採用すると、それは直ちに人間の生存の必要な条件となるであろう。こうして物的装置の生産、その性能、訓練、知識、協力の規則、効果的なコミュニケーションのシンボル等々派生的要求から発生する一連の行為系列が人間の生存のために欠きえない条件となる。派生的要求がこのように至上命令となるのは、それが生物学的な基本的要求充足の手段の一部となることによるものである。

マリノウスキーは文化の手段的至上命令として四つのカテゴリィをあげ、その文化反応をあげた。(13) すなわち、

至上命令	反応
(1) 物的装置の生産、使用、維持	経済
(2) 人間の行動の統制と、そのための技術的、慣習的、法的、道徳的規則の形成	社会統制
(3) 人的素材の更新、形成、訓練、知識の伝達	教育
(4) 各制度内部の権力の規定、力の付与、強制手段の供与	政治組織

文化反応としての政治組織の要素には政治権力が集団の成員に物理的強制を加えることに関して、その機会、方法、法的制限、正当性根拠がとりあげられるであろう。ついで権力が一方では成員の一定の自発的な服従をうるようになる、つまり権力の権威への転化が問題になろう。他方でそれは強圧の体制を強化することもあるであろう。しかしマリノウスキーが(2)の社会統制の反応としてあげているものは、社会的・集団的権力の問題で政治に重要なかかわりをもった機能として注目されねばならない。

個人が成年期に達して社会の制度的営みに参加するとき、かれに課せられた役割を正しく実行するよう保障する制裁の大部分は集団内の制度化された政治権力の行使からくるものではない。かれにとって「最もきびしい強制力」はその集団の報酬システムから来るもので、「怠惰な、無能な、または不正直な協力者」は次第に制度から脱落し、仲間はずれや追放されるに至るであろう。未開社会に見られる「規則、慣習、タブーに対する奴隷的な固執」の頑迷な保守主義的態度[14]はこのような集団的権力を背後にもっているとみられる。ひとがある行為に対して他から与えられる賞讃や支持はそれだけでその行為の十分な報酬になり、またその促進力となる。主人に嘉（ヨミ）せられることに感激する心情も同様のものといってよい。

このことは広く秩序維持にまで拡げて言うことができる。特定の社会で特定の秩序体系が維持されるのは政治組織の秩序維持機能に由来するよりもはるかに大きく、その社会の報酬システムや政治外権力の「政治的」機能に依存するといってよいのである。[15]

文化現象は物質系、エネルギー系、情報系の三要因から構成されている。物質系で見ると文化は人間の物質的製作物のすべてである。エネルギー系で見たそれは技術の開発によって人間が自己のものとした自然エネルギーの一定限度の支配と人間関係の協力から来るものである。情報系でみたそれは、自然、社会の環境からくる情報の処理、学習、

伝統の継受、規範の形成と維持などである。この三システムの要因は全体として特定社会の文化を形成している。文化の形成・維持・発展の中で情報システムの働きはその代表的成果を芸術・知識・道徳・宗教などに示す。情報システム機能の中心的役割はシンボル行動である。このシンボル行動こそ実に動物的自然に対して人間特有の文化を形成せしめる偉大な働きであり、これが人間をして万物に卓越する生物界の存在たらしめたものといい得よう。

《文化の評価》

文化は人間の基本的ならびに派生的要求を充足し、これによって自然環境への適応をもたらす手段の体系である。人間は自らつくりだした第二の環境であるこの文化によって高度な適応能力を獲得し、生物界の優越者の地位を占めた。文化の評価基準はまず第一次的には文化がもたらしたこの適応能力でなければならない。言いかえれば人間の生存のための諸要求を充足する文化の機能の効率によって文化は評価されるのである。この見地にたって文化の消長、おくれと進歩とを要約してみよう。

第一に複合的全体である文化の最終的価値は生物学的人間の基本的要求をよりよく充足することにおかれる。すぐれた文化は種の維持に効果をあげ、個体の生存を安全に、生き生きとしたものにするであろう。

第二に文化装置を構成する諸要素は人間の諸要求を充足することによって活力をうる。この活力による強化がなくてはその文化要素はおとろえ、ついには消滅の運命をまぬがれない。過去の文化の遺物はのちの時代に形態をとどめている。それは過去の時代にその機能を大なり小なり発揮していた。その機能が人間の生活要求に適合しなくなってそれは過去の遺物になったのである。

第三に複数の文化が機能を競争するような関係にあるとき効率の低い文化、すなわちおくれた文化は消滅にむかい、その文化のはたらいていた分野は高い、すすんだ文化によってとって代られる。この現象は文明進化の歴史によって

証明されるであろう。文化の伝播は生活や生産の技術にとどまらず、経済制度や政治制度にまでおよんでいる。この伝播現象はすすんだ文化によるおくれた文化の放逐過程であると見られる。この現象は文化の存在に見られる「生存闘争」[16]であり、従って文化の自然選択と見ることができるのである。

《自然律と文化律》

文化は自然の第一次環境に対し、人間が自律的につくりあげた第二次環境である。第一次環境は人間に与えられた環境であり、人間はそこに有機体としておかれる。人間はそこでは環境に他律的に規定されて存在する。これに対し、第二次環境は人間が自主的に形成したもので、また人間によって変改することができるものである。こういうものとして第二次環境は基本的には人間の自律の体系である。もっとも現実には人間は大ていの場合この第二次環境からも他律的に規定されているが。

人間は第一次環境の自然と第二次環境の文化との二重の環境の中に住んでいる。人間の生活している場は自然と文化の共同支配をうけている。自然律と文化律とでもいおうか。文化律が自然律を全く排除してしまうことができないことはすでにのべた。人間の生活には自然律の支配が基本的に貫徹している。自然律の支配は二つの領域に見られる。一つは人間自身が生物の一員であって、それとして自然律に支配されている。第二の領域は人間が存在している自然環境からくる支配である。さてこの自然環境からの支配に対して、人間は人為的に第二の環境をつくり出すことによってその自然律の支配を緩和することができ、人間の環境適応能力を大きく発展させた。すなわち文化環境の設定による適応力の増大である。人間以外の生物には自然律の支配は絶大である。他の生物は自然の支配力に直面して、それに受動的に順応し、自己の個体を変化させることによって適応してきた。これを自体形成的適応という。人間は大いに異なる。他の生物と同様、自然の支配に直面するが、それを文化的装置によってある程度緩和し、間接化

することができたのである。人間は自身の個体を変化させるよりも、むしろ自己の外側の存在に加工し、それを利用することによって人為的環境を形成し、自然律の支配を緩和し、自然への適応力を増大させた。人間の場合は他体形成的適応である。生物は有機体としての活動のために、体内の水分・糖分・体温などを一定範囲に維持しなければならない（ホメオスタシス homeostasis の維持）が、他体形成的に適応する人間はそのホメオスタシスへの負担を軽減することができて、自然環境への高度な適応力を発揮できるのである。人は冬眠することなく、また落葉することもない。

人間が文化装置という第二次環境を形成することによって高度な適応能力を獲得したことの代償として人間はこの文化の支配をうけねばならなくなったことについてはすでにのべた。こうして人間の生活は自然律と文化律の二重の支配をうけているのである。

《文化の発展》

文化の野蛮の段階ではこの二重の支配の中で自然律の支配が当然にきわめて強い。野蛮段階の人類は外の自然環境の支配を低い文化の装置でわずかに緩和しながら、内なる生物学的自然を文化的に実現した。文明に進むにつれて、文化装置は高度になり、強化され、外の自然律の支配は文化的に大いに緩和され、間接化されるようになっていった。野蛮から文明への人類の道を人間の生活態度から見ると原始的自然のままを生きることに始まり、習慣を形成し、それに忠実に従う生き方に移り、ついで創造性が高く評価されるように進んでいく。原始野蛮の段階でも人間はもちろん創造力を発揮して文化の進歩をはかってきたが、その進歩は遅々としたものであり、自然と習慣とが圧倒的に支配した。習慣的生活の優越は長く世界史の東西に普遍的に見られた。わが国でも徳川時代には社会の支配的な生活慣習をやぶるおそれのある発明、発見、思想をもたらす人物は危険視され、迫害をうけねばならなかった。伝統に

対する創造の軽視はいまなお日本文化の一特徴となっている。近代ヨーロッパは人間の創造的活動を飛躍的に進めた。そうしてヨーロッパ文化は世界文化の支配の座についたのである。

習慣の担い手は主として集団であり、他方、創造のそれは主として個人である。習慣生活から創造生活への人類文化の発展は個人の解放、個人の自由の伸張と並び進むのである。こうしてわれわれは人類文化の発展を個人主義を標識としてとらえることができるであろう。家父長制、奴隷制、農奴制、有産者支配、女性の隷属等、古代ギリシア以来の個人の拘束と自由・解放の歴史はこのことをよく物語っているのである。

文化の創造活動は複合的全体である文化のあらゆる側面にむけられる。それは科学技術の開発や生活を豊かにする発見にとどまらない。それは経済・政治・宗教・道徳・芸術等の精神活動がかかわる領域にも及んでいる。

≪都市と文化≫

さて都市は人間の文化的営為が総合的に、先進的にそして精選された形で実現される社会である。都市は実に人類文化の代表的生産物であるといってよい。「神は人をつくったが、人は都市をつくった。」政治体制の点でいっても、同じく都市は人間生活の協力組織の精選された先進的形態を提示してきたのである。

都市はまず人間生活の家族的拘束からの何らかの解放のうえにつくられる。古代ギリシア都市の自由は家父長支配からの端緒的な解放に対応する。[17] 原始的社会の群団と集団婚から、それに対立する原理に立った一夫一婦制家族が成立する。家族は男の家父長制で、私有財産の維持と相続のための制度であり、一夫一婦制は女の側からみたそれで、女が二人以上の夫をもってはならないということであった。この新生の家族には財産としての奴隷制がともなった。こうして家族の成立は最初の階級対立とその矛盾をはぐくんだのであった。[18]

古代家族は宗教的結合と血縁的結合という非合理的結集を土台とし私有財産制・奴隷制・一夫一婦制による階級対

立と不平等と嫉妬の暗い部分をともなった自給経済を原則とする家父長家族であった。古代家族はこういう性質から排他性の強い閉ざされたシステムで特徴づけられた。

家父長権力は農業を主体とする地域社会の権力となる。

ギリシア古代都市はこの家族と農村権力からある程度解放されなければ成立しない。アテネは①家父長支配からの解放、②債権者による債務者支配からの自由、③意志の自由、④秘密投票制、⑤言論の自由、が共通の問題の処理において実現した。はじめてここに共通の事務を処理する場、公共が成立し、公共事務の処理に権利と義務をもつ市民が存在するに至った。[19]

都市が人類の文化性を代表するに対し、家族と農村は人類の自然から文化に至る中間段階〝半自然〟[20]状態を反映した。家族が生物学的人間性にもとづいて成立しているのは当然としても、それは血縁を紐帯とし、宗教的きずなをもち、私有財産制、家父長制をとどめ、自給経済を指向する。それは基本的には排他性の原理を優先させた閉鎖組織であり、しかも単独では発展することなく、自然に帰する傾向をもつ。つぎに農村は農業、漁業など自然を直接に対象とする生業を主とし、血縁と地縁で結ばれた数家族からなる地域社会である。農村は家父長制の支配権力をもち、階級対立とその矛盾を包蔵し、個人の自由は拘束されていた。このような社会性から農村も発展性を欠く閉鎖社会の特性をもった。

≪最適密度≫

都市の農村に対するすすんだ文化性はその人口密度の指標によっても証明される。高い密度の下で快適な生活を形成できることは高い文化水準を示すのである。

同種の動物の集群内の個体間の距離には一定の限界がある。電線にとまるツバメはおたがいに適当な距離をとって

いる。なわばりや順位制の習性も集群の密度と大いに関係している。ネズミの動物実験[21]によると、過密状態におかれたネズミには異常現象が生ずる。すなわちオスのあるものは性的交渉の過剰やサディズムにおちいり、他のあるものは逆に性的交渉から身をひく。本来きれい好きなメスは、巣造りをかまわなくなり、産んだ子を落して見殺しにする。メスの受胎はふえるが流産することも多くなり、メス自身も死亡率が増える。性比がかたより、生き残ったメスはいっそうオスに苦しめられる。オスの社会的順位は不安定となり、尾のかみ合いがはじまる。これに対し、人は劇場や乗り物で満員状態にすすんで入りこむのが見られ、人は一時的にもせよ高い個体密度の中で自己をコントロールできる社会的能力をもっている。[22]

アメリカの動物生態学者W・C・アリー（Warder Clyde Allee, 1885～1955）は各種の動物について成長率・増殖率・死亡率・発育速度・寿命などの諸現象に対する最適密度（optimum density）の存在を証明し、最適密度の高い動物の方が社会性が進んでいるという仮説を立てた。この仮説は現在では法則として認められている。アリーはまた社会性の発達した動物ほど、その種族集団の盛衰は外部の自然環境の働きよりも、社会そのものの中に自らつくり出す社会圧縮に負うところが多いという。人間やサルの集群について共通に見られるこの最適密度を低める要因は権威主義によるボス社会の形成、なわ張り争いなどの排他的エゴイズムである。日本にひろく見られる家族主義や地縁・派閥などの排他的結集、年功主義等々は日本人社会における最適密度を低める要因として作用しているということができよう。

都市は群居動物である人間が最適密度をより高めた集団生活形態である。都市の形成は人間の社会性が高い段階に達することによってはじめて可能になるのである。この高度な社会性は高い文化的条件に支えられねばならない。排他主義や権威主義を克服して、自由と平等と協同との調和的実現の上に理想の都市は成立するであろう。日本の都市

は人間の文化的適応の高度な形態としての都市となることに失敗した悪例であることをわれわれは残念ながら認めねばならない。日本の都市の多くは人々の健康と安全を脅かし、経済生活と文化生活との調和を破壊するような集団生活の場になっているのである。

≪国家の成立≫

都市は理念的には人間の共同生活の高い文化水準を表象、自由・平等・友愛の政治的価値を可能な限り実現する社会である。政治支配の包括的組織である国家は当然、この都市と重要なかかわりをもった。歴史的に見て、ギリシア都市以来、国家は都市の自治体制、すなわち都市共和制と対立関係をもってきた。歴史国家は階級支配関係の上に立つが、この階級支配関係が都市のもとづく自由・平等・友愛の共和主義的原理に対立したのである。

エンゲルスは「家族・私有財産・国家の起源」で説いた。[23] 歴史国家がもとづく階級支配関係は、氏族組織を単位として編成されていた原始社会から一夫一婦制家族が成立したとき、男の女に対する支配という形で最初に生じた。夫の妻に対する支配、家長である男の相続の指定、私有財産の成立を通じて父権制と家父長権が発生した。私有財産は人身に及び奴隷制が生じ、商品生産の媒介を経てここに生産関係における主人と奴隷の階級支配関係が生じ、その上に家父長制国家が成立した。つぎに中世には領主と農奴の階級支配関係の上に封建制国家が成立するに至った。

家父長制国家はそれが地域的領域による権力体制であったことで、原始社会の種族権力体制を原理的に変革したものであった。エンゲルスは終りに近づく氏族制度とひそかに発展してくるアテナイ国家との交代の過程の主要な一面をつぎのようにのべた。[24]

はじめは都市と農村の分業、つぎに都市の種々の労働部門間の分業によってつくりだされた新しい諸集団は、その利益の擁護のために新しい諸機関をつくりだし、各種の公職が設置されていった。そしてつぎに、若い国家はなによ

りも自己の力を必要としたが、これは航海を業とするアテナイ人にあっては、さしあたり個々の小戦争や商船保護のための海軍力でしかありえなかった。……各ナウタラリア（ソロン以前の時期に各部族に設けられた小区画）は、一隻の軍艦を供出し、これを艤装し、乗組員をつけなければならず、このほかさらに二人の騎兵を供出した。この制度は氏族制度を二重に攻めたてた。第一には、それが武装した民衆の総体とはすでにもはやそのままでは一致しない公権力をつくりだしたことによって。そして第二には、それがはじめて民衆を公的目的のために、親族集団によらずに地域的集住によって区分したことによって。

分業による生産力の増大にともなって公共の機関と公職が生じた。公共とは多くの私的単位にとっての共通の仕事を指している。軍事力の用意が必要となった。軍事力の調達は氏族・部族の親族組織の枠はあるものの、地域組織からなされた。こうして公権力の形成に氏族制度の血縁の原理に加えて地縁の原理が導入される。この政治体が国家形態を整備するに従って地縁性が次第に強化され、逆に血縁性は次第に弱まっていった。ソロンの政治改革（紀元前五九四年）で、土地所有の大きさに応じて、国民の権利と義務がきめられたことも血縁的紐帯を弱めた。[25] ついでクレイステネスの革命（紀元前五〇九年）では氏族と胞族にもとづく古い部族を無視して、百の自治区（デモス）を設定し、居所だけで市民を区分した。デモスは「十で一つの部族を形成したが、これは古い血縁部族と区別するため、いまや地縁部族とよばれる。[26]」

≪古代都市の没落≫

古代ギリシアの国家形成の頂点であるアテナイ国家は「十の部族が選出した五百人で構成される評議会によって、そして窮極的には、すべてのアテナイ市民が出席権と投票権とをもつ民会によって、統治された。これとならんで、アルコンやその他の官吏が、種々の行政部門や裁判所をつかさどった。」このアテナイ都市国家は移住民、解放奴隷

からなる居留民を多数受け入れた。そうして「血縁制度の諸機関は公的事項からおしのけられ、私的団体や宗教団体になりさがった。[27]」

ギリシアの都市国家の共和制は都市自治体の自由を高度に実現した。古代ギリシア人は文化装置としての都市建設の偉業をなしとげた。都市の自由は氏族権力と家父長権力からの解放によって達成された。氏族権力からの解放は二つの方向をとった。「専制的な権力になるか、自由な権力になるか[28]」である。専制的な権力は家父長制権力、貴族制権力、王制権力の方向をとるが、自由な権力は都市自治体の権力となった。そうして氏族社会から出てこの都市自治体にならなかった古代社会は滅亡の道をたどった。[29] 都市の自由が成立するためには家父長支配を含めて家族からの一定の解放が必要であった。父権制の家族の家長に隷属していては公共の仕事に権利と義務を負う市民となることはできないからであった。「市民なければ都市もない。」「一般に古代及び東洋の都市は、市民なき都市であった。そこには氏族または家族、貴族、官僚、奴隷、農奴等、それらはいたが、市民と見なすべきものはいなかった。[30]」

こうしたギリシアの古代都市、そうして同様にロマの都市はともに奴隷制によって民主的自由が失われることで没落する。「家父長支配によるところの奴隷制、それから、債権の支配による奴隷制、それから解放された都市によって実現された自由が、今度は社会的な奴隷制に陥って行く、その最初のきっかけになったのは農村から[31]」であった。農村では家父長奴隷制、債務奴隷制が残っており、最悪の条件の下で農業に従事していた。都市でもそれがみられた。この奴隷制が社会一般を支配するようになった。農村の奴隷制にもとづく階級支配が、同様に都市にひろがってきた階級対立と結びついて古代自由都市を滅亡させた。「ロマの軍がギリシアを襲ったとき、ギリシアの貴族主義者たちは真先にこれに降ったのであった。アテネその他の諸都市の民衆はロマに抗して戦ったが、すでに内部の貴族主義者たちによって裏切られたギリシア諸都市はついにロマに征服されてしまった。[32]」

ルネッサンス都市も農村に拠点をもつ政治勢力によって没落した。ルネッサンスの自由都市、ロンドン・パリ・ヴェネツィア・ニュルンベルグ・ケルン等は農村の農奴制の上に立つ封建的支配に対し「自由な交通」をたたかいとってきた。「自由な交通」これこそすばらしい人間の文化的営みであった。「自由な交通は、商工業をさかんならしめた。従来は農業と牧畜とだけが主要の生業であったが、自由なる交通と市場の平和とをもって都市が自らを農村と区別するに至って、商工業なかんずく工業が主なる生業となった。」[33] こうしてルネッサンスの都市は成立した。自由な交通から人身の自由、一定の度量衡、貨幣の流通、税関の自由等が生じ、都市の自由一般が発展した。[34] 都市は都市法を持ち、都市裁判所がその法秩序を守った。都市は人間がもちえた高度な文化的条件の上に成立することができた。

しかしルネッサンスの自由な都市共和制の文化体制は時の歴史的現実の中で、機能的不適応の側面を次第に露呈してきた。それは都市の担い手である組織体、職能組合ツンフトの排他性の強化として、あるいは市民の階級的分化と対立、上層市民の特権支配の固執としてあらわれた。自由都市の発展で圧迫されていた農村の封建的支配層はこの状況に乗じてその支配を都市に及ぼし、都市共和制を解体させた。そうしてかれら自身は封建の分権的領主制から絶対主義の中央集権的君主制へ歴史的な転換をとげたのである。

ルネッサンスの革命がまず都市を解放し各々の自由都市を拠点として農村の解放にすすもうとしていたとき、これを阻止するために、封建的特権的支配者たちは、都市にのこっていた上層市民の特権的支配および農村の封建的支配を地盤とし、解放のおくれた農村を拠点として、都市を中心として打破された各々の地方の封建的支配を全国的に結成することによって、封建的支配を領主的支配から絶対専制君主的支配に再編成していった。[35]

政治組織は共同生活の統合機能の一部として役割を演ずる。ある共同生活圏に政治組織が政治機能をはたらかせるとき、複数のものが一時的に多元的に並存することがあっても、長期的には作用の及ぶ程度・範囲のちがいはあれ、その生活圏に対して包括的に一元化する。これは政治の歴史が示すところである。そうしてルネッサンス都市の没落では農村的国家権力と都市権力とが対立・衝突した結果、農村的国家権力の勝利において政治組織の一元化がなされたのであった。

ルネッサンス都市も、ギリシア・ロマ都市と同様に〝半自然〟の農村に基礎をもった権力集団が〝文化〟を代表する都市の権力集団をおさえて一元的支配を確立した。その理由はどこにあったのであろうか。二つの場合とも都市の側に階級的対立からくる内部分裂が顕在化していたことを見ることができる。この内部分裂は都市の自壊要因となったことは確かである。さらに自然と文化の対比で言えば、農村の権力は家族、私有財産あるいは農奴制の身分的支配関係を基礎にもっていたのに対し、都市の権力は自由化された市民の共和制に基礎をもっていた。農村権力はかく物質的で自然に近く、都市権力はかく観念的で文化的である。前者は自然の強固さをもつ。後者は市民の態度によって強くも弱くもなる文化的・可塑的部分である。都市が階級対立で分裂するとき、都市権力はその可塑的脆弱さを露呈することになるであろう。もっとも都市権力は都市のもつ高い文化の主として技術的な諸力によって農村に対して優位を維持することができる。しかしそれも内部分裂が敵対関係に至らないまでのことである。敵対関係にまでなるとそれは都市権力の自壊作用をすすめるであろう。こうしてルネッサンス都市は自らがつくり出した武器を使用する農村の封建権力に敗れ去ったのである。(36)

（1）Edward B. Tylor: Primitive Culture, 2 vols, 1871.

（2）Bronislaw Malinowsky: A Scientific Theory of Culture & Other Essays 1944, p. 150. 参照、B・マリノウスキー

著・姫岡勤・上子武次訳「文化の科学的理論」、一九五八年。

(3) Ibid., p. 36.

(4) Ibid., p. 75.

(5) 衝動は呼吸衝動、飢え、性欲、疲労、運動衝動、眠気、膀胱圧迫、結腸圧迫、恐怖、苦痛があげられる。飢えは食物摂取の行為にうつり、満腹の満足を以て終る。他の衝動も行為・満足でもって終る。Ibid., p. 77.

(6) Ibid., p. 79.

(7) Ibid., p. 87.

(8) Ibid., p. 90.

(9) Ibid., p. 95.

(10) Ibid., p. 101.

(11) Ibid., p. 119.

(12) Ibid., pp. 120—5.

(13) Ibid., p. 125.

(14) Ibid., p. 130.

(15) 太平洋戦争のさ中、わが国で「非国民」というレッテルを貼られることはきわめてきびしい社会的制裁を意味した。

(16) Ibid., pp. 143—4.

(17) 羽仁五郎「都市の論理」一九六九年、一二七頁。

(18) 羽仁・同上書八八—九頁。エンゲルス著、戸原四郎訳「家族・私有財産・国家の起源」（岩波文庫）八六—七頁。

(19) 羽仁・同上書一二七—九頁。

(20) 同上書六一—二頁。

(21) 香原志勢著「人類生物学入門」一九七五年、一九三—四頁。

(22) 同上書一九五—八頁。

(23) エンゲルス・前掲書八六—七頁、九七—八頁、二一三—二四頁、二三三頁。

(24) 同上書一五一頁。
(25) 同上書一五三頁。
(26) 同上書一五五頁。
(27) 同上書一五六頁。
(28)(29) 羽仁・前掲書九五頁。
(30) 羽仁五郎「都市」一九四九年、一七頁。
(31) 羽仁「都市の論理」一三三―四頁。エンゲルス・前掲書一五七頁。
(32) 羽仁「都市」五八―九頁。
(33) 同上書六六頁。
(34) 同上書七一―二頁。
(35) 羽仁「都市の論理」一五七頁。
(36) 羽仁「都市」一五八―六〇頁。

四　政治学の課題

人間性の生物学的規定の深遠さとその文化的規定の意味について考察を進めてきた。古代ギリシア以来政治理論の形成にすぐれた成果をあげてきた先人思想家はこの二面の問題に大きな関心をよせてきた。しかし二〇世紀に入り、とくに第二次大戦以後はこの人間学は科学としての方法を整備してきた。そうしてすでにその大要を見たその成果は以前の政治学にかなりの変容を迫るものとなった。政治学はこの人間の条件をその理論体系にいかに取り入れたか、あるいは取り入れるべく要請されているかを政治学の課題として取り上げて見たい。

《行動科学の衝撃》

行動科学（Behavioral Science）は人間行動の科学的解明をめざす学問である。行動科学の名称が正式にあらわれたのは一九五〇年代アメリカにおいてであるが、すでに一八三〇年代コント（August Comte, 1798～1857）が社会学を創始した時から科学としての体系化がすすんできた。それは社会学・心理学・人類学を中心として経済学・政治学・法律学・教育学・歴史学等、社会・人文諸科学を横断した研究領域をもっている。他方、生物学からの人間研究は絶えず社会科学における人間研究を刺激していた。これら人間を対象とする科学の諸科学の横断的展開に加えて、さらに、主として数学と物理学からする自然科学の方法論が行動科学の理論形成にとり入れられた。

それは人間行動に関する一般理論の形成を試みた。この一般理論は体系（system）としてモデル化された。システムは相互に関連し合う要素（element）からなる全体で、各エレメントはそれぞれ機能をもち、また全体としてシステムの機能を実現する。システムは環境をもち、その環境のシステムから入力によって作動し、その活動の成果を出力によって再び環境システムに送り出すのである。行動科学はさらに資料の計量化、モデル化を積極的にとり入れた。こうして人間行動の研究は自然科学に共通する方法によって証明され、検証される領域を拡げた。

行動科学の発展は政治学の研究方法に大きな変革をもたらした。第一に、それは政治生活を一つの行動体系として分析することを可能にする一貫した論理的カテゴリを用意した。つぎにそれは諸学問間の伝統的境界に改めて検討を加え、諸学問の新たな関連と境界の設定をひき出した。(1)

《心理学的要因》

行動科学の領域に数えることができる政治理論における人間行動の重視は、グラハム・ウォラス（Graham Wallas）の「政治における人間性」（Human Nature in Politics, 1908）に鮮明にあらわれる。彼は人間の政治行動の理知主義的認識に疑問を投げかけた。政治行動は「主として習慣と本能、暗示と模倣という潜在意識過程の問題である。」(2)

そうして彼は「人間は他の動物と同じく感覚的印象の絶えまなき流の中に生きている」[3]との人間性と動物性の連続性の認識を明示したのである。こうしてウォラスはバジョットの系統をついで政治行動の心理学的理解を発展させた。

個人のパーソナリティの心理学的要因が政治行動に与える影響についてオーストリアの心理学者フロイト（Sigmund Freud 1856～1939）の唱えた学説は政治理論にきわめて大きい衝撃を与えた。彼も無意識界の行動への影響力を重視し、それに精神分析理論からの解明を行なった。幼児の心的生活は性的欲動のエネルギー＝リビドー（libido）による快楽の原理に支配されている。成長するにつれて環境への適応から自我が形成され、自我は現実の原理からくる行動準則、義務や禁制をもって快楽の原理の実現をおさえる。しかしリビドーは消滅することなく、いろいろな心理作用をへて別の性質の欲求にかわる。これは精神分析学で重要視される補償作用である。リビドーが自我や超自我（＝良心）に調和して方向づけられるのは昇華（sublimation）といわれ、仕事、スポーツ、芸術あるいは自己犠牲的行動等に発現する。[4] フロイトは快楽の原理から現実の原理への移行において基本的な役割を果たすものは両親であるという。両親は幼児の心に矛盾、葛藤をひきおこす。親は幼児に快楽を与えるものであると同時にそれに制限を課すものであるからである。

フロイトに見られるように精神分析学者は人の性格形成における幼児期の意義を強調する。従って、両親が子供に及ぼす社会化の役割が重要視される。日本人に特徴的に見られる〝甘え〟の精神構造は家族主義に強く支配された家庭における社会化から主として生み出されたと見られる。[5]

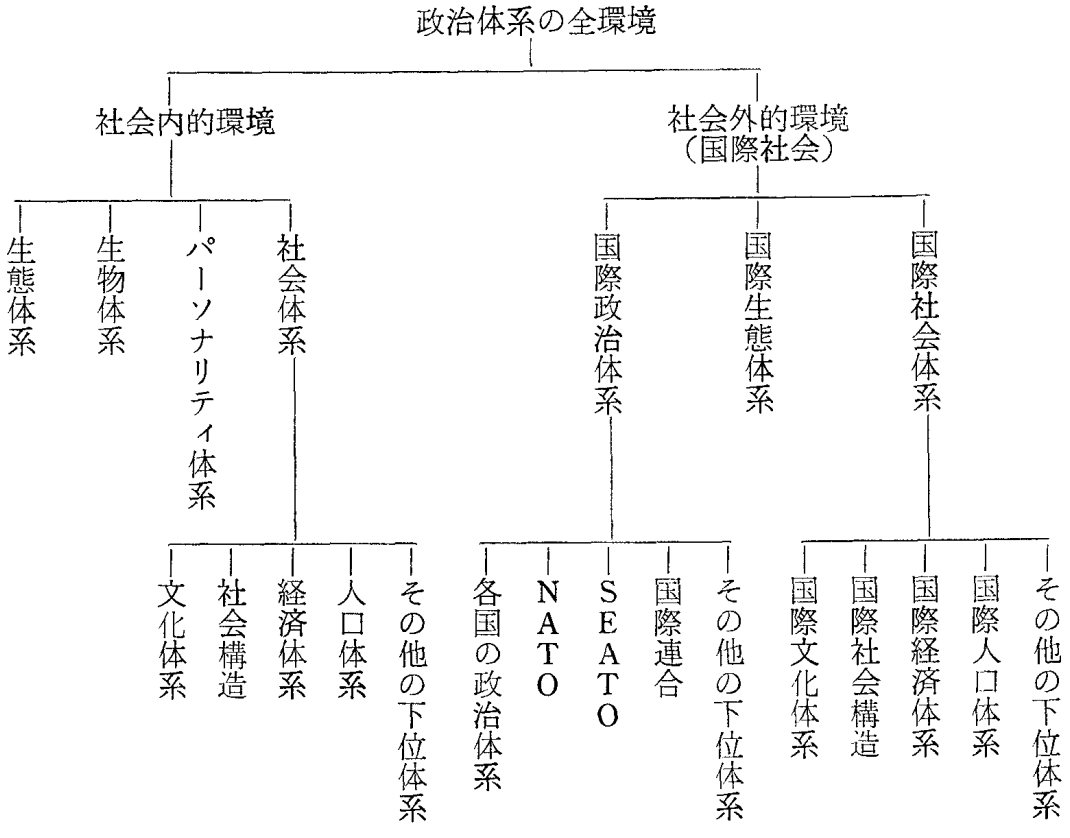
攻撃性、暴力性、支配欲、権威主義はいずれも政治的対立を生み出す性格類型であるが、家族における政治的社会化が大いに関係があるとされている。権威主義的性格は日本や中国の伝統的社会で深く民衆に植えつけられてきた。「葵藿之傾レ葉（ムクヲ）、太陽雖レ不ニ為（メニガ）レ之回光一（セ）、然向（モカウニ）レ之者誠也、」（魏志陳思王伝）ここには権威主義的服従の態度が高

く評価されている。T・W・アドルノ（T. W. Adorno）らは権威主義的性格の政治行動へのあらわれとして、①強い体制服従の傾向、②伝統的な価値体系の盲信、③権力への忠実な服従、④善悪・黒白・正邪等の単純な対置によって区別される手軽な道徳観の信奉等を指摘した。このような権威主義的な態度は自己の力に自信がなく、自己を弱者とみる劣等観念のもち主の特徴となっている。かれの内面の弱さが外側の人物や制度の堅固さに補償を見出そうとする。権威主義的性格は、社会秩序の安定している平穏な時代には、保守政党支持にむかうが、社会秩序が動揺し、変動の時期になると、ファシズムの暴力的反動に流されやすい。(6)

また保守主義者と自由主義者の間のパーソナリティの相関関係を研究したマックロスキー（McCloskey）は保守的な態度は、教育程度が低く、時代の動きをあまり認識しない、知性が低い階層の人々の間に特徴的に見られることを発見した。(7)

これら心理学的要因によって政治的行動を説明する手法は政治行動論の主要な流れをつくっている。政治行動の心理学的解明は多大の成果と同時にその限界をもっている。第一に心理学的政治行動分析は自然科学的一般法則を政治の世界に樹立しつつある。第二にこの成果は政治学研究の対象をより限定するのに役立っている。というのは政治学の対象はとかく範囲が拡がりやすいのである。第三に心理学的分析は政治事象の一面の説明にすぎないことが知られる。政治事象は社会的・歴史的・個性的・価値関係的要素を中核とするものである。心理学的分析はこの政治学の中心課題を直接に対象とはしないのである。第四に心理学的分析は欲求や感覚の作用を対象にする一方で、人間の理性的能力をなおざりにする傾向がある。しかし人間は自然的衝動を文化的に実現する理性的能力をもっていることは確かである。

≪政治システムの環境≫



政治行動論は政治の構造と機能を政治体系（political system）の分析システムに体系化することによって一つの科学としての領分を確立した。そうして人間の生物学的存在性はこの政治システムの環境として関連づけられた。D・イーストン（David Easton）は政治システム分析理論を指導的に推進した。

イーストンは社会生活の中から政治生活を区別し、これを分析システムとしての政治システムに分離する。政治システムは人々の間の相互作用のセットであり、それは社会に対する諸価値の権威的配分を強く志向している。[8] イーストンは多種多様な政治行動のすべてを政治システムの中に包含するのではなく、それらを重点的に社会に対する諸価値の拘束的・権威的配分に関するものに限定し、それをシステム化する。システムは環境のシステムから入力をうけて作動し、権威者が政策・法律・行政等の決定をとおして価値の権威的配分を行ない、出力として環境に流す。入力は環境システムからの政治システムへの要求と支持の形態をとってはたらく。政治システムの環境をイーストンは社

会内環境と社会外環境とに分け、それぞれをさらに図のように分類した。(9)

政治システムと相互影響関係にある環境システムの中に、イーストンは生物学的人間にかかわる要因を多くあげている。生態システムは人間の生活環境の物理的条件と人間以外の有機体との関係を内容とする。自然資源、地勢、領土の大きさ、気候、動物・植物との共存ないし排除の関係などがこれである。生態システムは生物学的人間の外部の自然システムということができる。そうしてこれは社会内から社会外の環境に及んでいる。生物システムは人間の行動の動機の決定要因となる遺伝的性格などの生物的素質を内容とする。パーソナリティ・システムは、政治システムの構成員がもつ人格的特性と後天的に獲得する動機にかかわる。これら両システムはともに生物学的人間のもつ要因である。社会システムのうちの人口システムも大いに生物学的人間にかかわる。また社会構造の中の家族も同様である。社会システムの経済システム、文化システム、その他の下位システムにも生物学的人間との関連を見出せよう。さらに社会外的環境においても国際政治システムは戦争・紛争・競争・協同の多様な諸関係において生物学的人間とのかかわりを検出できるにちがいない。イーストンはこうして政治システムの環境の中で生物学的人間の諸要因に大きな範囲を割り当てた。

かれはしかし、環境の生物学的人間の要因と政治システムとの圧力の交換形態や圧力の評価についてはふれるところはない。環境システムの出力が要求と支持との形態で政治システムの入力となり、ついで権威者の決定が出力となって環境に流れていくという一般理論がなされているにとどまる。

ここで第一の問題は圧力の交換形態が政治システム分析理論でいかに処理できるかである。社会内に食糧の欠乏が起り、これに対し政治システムは反応し、人口対策と食糧輸入対策で対処したとする。この一連の政治過程について、政治システムの構成員が食糧の欠乏への対策を政治システムに要求し、政治システムの権威者はその要求にこた

えて人口対策と輸入対策を決定し、実行するとき、この過程はイーストンの政治システム分析理論にまさにあてはまる。しかし構成員がこの要求を政治システムへ入力しない場合、政治システムは反応をおこさないのであろうか。食糧の欠乏から発する要求がないとき、それに対策を講じない統治者はいなかったわけではない。それは無能な統治者であるけれども、やはり政治的権威としての統治者ではあろう。しかし要求がないのに事態の深刻さに動かされて、すすんで救済にのり出す統治者もいるであろう。こういうケースはイーストンのシステムの中には入ってこないのではないか。

第二の圧力の評価の問題は、権威者は諸価値の権威的配分をなすとき、対象を自由に選択できるかどうかの問題である。ある種の価値については権威者は配分を選択できずに拘束されることはないであろうか。大気の汚染で人体に被害が起きている。その汚染源の除去の要求に対して統治者はそれが人為的に生じたものであるとき、他の価値との比較選択の配慮は許されず、汚染源の除去を指令しないわけにはいかないであろう。すなわち人体の被害は重大な価値の侵害であり、その価値の回復は権威者の決定を拘束する。権威者の行なう価値配分には、対象となる価値自体の中に決定を必至的に要請するような内容を含んだものがあるはずである。つまりある価値は配分を支配するのである。価値評価の問題は政治システムの一般理論の中には入らないにしても、それがこの理論そのものをはみ出る——権威者の価値配分が価値によって拘束される——ことになれば、システム理論はそこに限界をもつことになるといえよう。アリストテレスは欲望のかかわる事項は、理性的事項よりも優先的に処理すべきことを主張した。

第一の問題についてはG・アーモンド（Gabriel Almond）らが展開した政治システム概念がイーストンの概念の不備を補うことができたようである。彼は政治システムを物理的強制の脅威によってバック・アップされた決定に影響を及ぼす、諸役割の類型（pattern）化された相互作用であるとし、「正統な物理的強制力」こそが政治の標識とな

るという。[10] アーモンドは政治を政治以外の現象から区別する標識を「正統な物理的強制力」におくことでイーストンより、より広い政治の領域を設定した。彼はS・ヴァーバ（S. Verba）らと共同でアジアやアフリカの発展途上国の政治状況とヨーロッパ先進諸国のそれとを比較する規準を設定しようとする努力を通じてそのシステム概念を考案した。

アーモンド以前のシステム論では統治（Government）の諸制度を一つの従属変数、つまり社会的・心理的・文化的・経済的決定要因に依存する副現象とみなす傾向が圧倒的であり、政治を社会の変化のプロセスにおける基本的な主変数とみる見解はほとんどなかった。ところが発展途上国においては、社会体系の中で、政府のイニシアティブの主導性が最大限に発揮されており、そこでは権力を掌握している政治エリートが政治機構を通じて社会を再編成し、その社会を飛躍させようとしている。そこからアーモンドは、政治システムは、基本単位である政治行為によって構成されたシステムであるだけでなく、それ自体が行動するシステムであるとし、政治システムを環境と相互作用する一つの行動単位として把握した。そこから彼は政治システムの機能遂行の能力（capabilities）という概念[11]を使用する。これは権力に代る術語であるが、政治システムの仕事の種類とか、力の程度などの質的・量的大きさの測定を意図して作られ、機械の性能の概念に類似したものである。

アーモンドは政治システムに五つの能力を区別する。

(1)抽出能力（extractive capability）　国内および国際環境から物質的および人的資源を抽出する際の、政治システムの実践活動の範囲に関するもの。例えば租税・兵員。

(2)規制能力（regulative capability）　行動に対する調節と政治システムから出てくる個人および集団関係の流れに関連する能力である。これは行動をコントロールするための正統的強制という政治システムの中心的能力。規制の

対象、頻度と強度、許容の限界などが問題になる。

(3)分配能力（distributive capability）　財・サービス・栄誉（status）・法令および政治システムから社会内の個人と集団に及ぶさまざまな種類の機会の配分に関連する能力。価値の配分者としての政治システムの活動能力の側面で、税制・福祉・教育など。

(4)象徴能力（symbolic capability）　政治システムからその社会や国際的環境への有効なシンボルの流れの程度である。国旗・軍隊の儀式・王室や高官による訪問・政治指導者による声明など。

(5)対応能力（responsive capability）　環境から生じる要求に対してシステムから出力としての活動が対応できる程度に関係した能力である。

つぎにアーモンドは政治システム自体の機能性を重視し、それを説明する概念として変換機能（conversion function）の諸カテゴリを導入する。これら諸機能カテゴリはそれを担う政治構造の分化の進んだ先進諸国のいろんな政治集団・組織の分担する役割から引き出される。すなわち①圧力団体、②政党、③議会、④政府と官僚、⑤裁判所、⑥選挙民とコミュニケーションという構造的要素から、①利益の表出、②利益の統合、③権威的決定作成、④ルールの適用、⑤ルールの裁定、⑥政治的コミュニケーションの機能カテゴリが設定されるのである。発展途上国にあってはこれら諸機能は構造分化の低いレベルで処理されていることになる。

《個人主義》

現代民主主義の政治思想にとって個人主義は基礎的な思想体系をなしている。個人主義は自然から文化への人類生活の歴史的発展の産物としてあらわれた。

人類の社会形態は原始社会から農奴社会を経て近代社会に至る基本線をたどった。原始社会は構造的には主として

血縁集団からなっており、部族（tribe）をこえて複雑化していない。文字はまだ用いられていない。経済活動は狩猟・牧畜・原始的農業で専門分化が進んでいない。政治の権威は首長や長老からはたらかされたり、ときには権威の特定形態をもたなかったりする。宗教の点では人々はきわめて迷信的で、生活のできごとが超自然力に帰因される。行動様式の点では、人々は新様式を好まず、運命論的で、非科学的であり、また現在志向的である。かれらの行動の社会的統制は罪についての内面的意識に訴えるよりもむしろまわりのものに知られることへの恐怖感を刺激することを基本的手段とする。つまりこれは〝恥の文化〟（the shame culture）の支配である。原始社会のこれらの特徴の中でとくに顕著なものは①孤立性と②無変化性とである。(12)

原始社会は霊長類の群居的自然にもっとも近いものである。農奴社会は経済的分担の点で大きな変化が出てくる。原始社会では生産者が自己の労働をふくめて生産手段を統制し、生産物を他人の財貨・サービスと交換する。農奴社会になると生産手段の統制は生産者から自ら生産に従事しない集団の手に移され、この集団は権力の使用をささえにして行政的・管理的役割をうけもつ。集団間の財とサービスの等価交換はなくなる。原始社会では剰余価値は直接、成員間で交換されたが、農奴社会では異なり、耕作者の剰余価値は統治集団に移され、かれらはその一部を自身の生活にあて、残りを耕作しないが、特定の財・サービスを提供する集団に分配するように利用する。

農奴社会は領主の支配と保護の下にある封建社会であるが、その構造は基本的に血縁集団からなっている点では原始社会と共通である。その社会組織の基本単位は拡大家族である。この同族集団は労働、安全、病気、老年の扶助の基本単位であり、教育や社交の場となり、婚姻に大きな役割を果たす。農奴社会の人々の忠誠はこのため家族と血縁集団に集中され、それを越えることは殆どない。部族などの農奴社会のより大きい単位も本質的には拡大家族の集合体である。村もまたいくつかの血縁集団から構成されており、その血縁の結びつきが村の政治的対立を分けるものと

なる。

農奴社会の人々の行動的特徴は強い保守性である。かれらは伝統的様式を尊重し、新様式と変化を好まない。

テンニース（Ferdinand Tönnies, 1855～1936）は原始社会と農奴社会を一括した伝統社会と近代社会とのそれぞれにほぼ対応する概念としてゲマインシャフト（Gemeinschaft）とゲゼルシャフト（Gesellschaft）の概念を用いた。ゲマインシャフト社会は血縁集団で構成されており、個人はこの社会的単位に生まれる。そうして成員としての適合性も帰属感も全く問題にされない。人間関係は情緒的である。これに対し、ゲゼルシャフト社会は近代の官僚制的・産業的組織で類型化される。成員となることは個人の選択による。その地位は固定的でなく、制度の変化する合理的な必要によって指定される。血縁の紐帯は無関係になり、人間関係は外面性と情緒的中立性とによって特徴づけられるのである。

第二次大戦後、T・パーソンズ（Talcott Parsons）は伝統社会と近代社会とを分類する五つの規準を提示した。それは①帰属―業績、②個別主義―普遍主義、③情緒性―情緒中立性、④自己志向型―団体志向型、⑤拡散性―分化性である。①の基準は伝統的社会で、年令、性、血統、などの個人の帰属によってある長所・価値が付与されるのに対し、近代社会は業績がこれに代る関係を示す。②は特定の状況ですべての個人に規則が同じ方式で適用される、「法の下の平等」をさす普遍主義で近代性を、人の属する家族、部族、階級等によって特別に個別的な、有利な処遇をうける個別主義で伝統性を示す。情緒性はすでにふれた。④は恥の文化と罪の文化とにほぼ対応する。自己志向型個人は良心や罪の感情によってよりも、むしろ自分が辱められるとか罰せられるとかの恐怖によって社会規範を守る。団体志向型個人は規則に従って行動しようとし、個人的な価値を社会的善のためにおさえる。自己志向型は伝統社会のもので、そこでは抽象的な共同善への関心は、直接、個人のあるいは家族の価値と結びつかなければ、きわめ

て弱くなるのである。この規準は他にくらべてすこし曖昧な点をもっている。⑤の規準は、近代の法と契約の体系が専門分化を特徴とするのに対し、伝統社会では規則や義務、結合が、血縁性や習慣に見られるように、拡散性を示していることを意味している。

原始・農奴の伝統社会と近代社会とを両極に対置させて人類社会の発展を分析する代表的諸学説が一様に示していることは自然から文化的分化を加えるような発展の線をたどっているということである。人間個体について見ると、血縁集団の自然的群居システムの中で成員である個人は血縁の基本集団を単位として行動していたが、社会の近代化につれて、個人が集団から切り離されて、行動の単位としてふるまうようになってきた。人間行動の価値基準のもっとも基礎的なものとして血縁集団にかわって個人が登場した。個人主義はこうして伝統社会に対して近代社会の文化的標識となる。人間は動物的自然的個体として家族の中に生まれるが、抽象的文化的個体として近代市民社会の個人となるのである。

《政治の後発性》

生物学的人間の行動の発展は自然から文化への線をたどった。それは人間行動における自然的要素の支配が圧倒的であった原始の段階から、文化的要素の影響力が次第に拡大し、自然の威力を緩和していく過程であった。人間生活の様式は自然への消極的な順応から積極的な自覚的な設計を許すものとなっていった。現象的に見れば、それは単純から複雑へ、未分化から分化への様相をとった。政治は人間の社会生活の統合、調整の作用を担当する文化装置として、この発展の系列の中の後発部分となった。

政治の後発性は二様の意味であらわれる。一は行動類型の過程的段階としてであり、他は時間的順序としてである。「政は政なきを期す」といわれることは一面の真実である。もろもろの社会的現実と社会関係が先に人間を必然

的にとらえている。そこに社会が全体として対処しなければならない問題が生じなければ政治は生じないであろう。ロックの自然状態はこういう社会段階である。しかし問題は必然的に生じる。そうして政治は登場する。政治は問題を解決して、政治が必要でない状態に至るのである。政治が登場する条件は政治の前の社会状態に依存する。従って政治システムが作動し、効果をあげる条件すなわち政治のアウトプットは政治のインプットに依存するのである。アリストテレスのように、まず欲望の問題に対処し、「理」の問題は後にするのも、社会的正義を追求する「理」の作業である政治の後発性を示している。

以上の政治の過程的後発性は、多くの場合そのまま時間的・歴史的順序としての政治の後発性になるといってよい。社会の問題はまず社会のレベルで処理され、そこで片付かない場合に、政治のレベルに移される。政治の時間的後発性の関連で重要なのはマルキシズムの経済決定論の示すものであろう。生産力（技術）の発達状態が生産・所有の諸制度である生産様式を決定し、この生産様式が家族、宗教、道徳、政治など他の諸制度を決定する。従って社会諸制度はいわば重層構造をなし、下の層は生産様式とそれにむすびついた階級関係にかかわる社会・経済制度であり、上の層は宗教、政治、その他の諸制度である。これら上部構造は下部構造から生じ、それに規定される。マルキシズムのこの経済決定論は基本的・長期的には法則性をもっていると見られる。そこで生産力の発展によって社会・経済制度が前の段階から変革されたのに、政治制度は前の段階にとどまっているという時間的ズレが生ずることになる。そうして政治制度の文化的な遅れが問題化するのである。これは日本では典型的にあらわれ「経済は二〇世紀、社会は一九世紀、政治は一八世紀」と批判されることがある。

≪政治文化≫

「政治の近代化」の分析を主題とする政治発展論もまた政治の後発性と関係する。G・アーモンドは先進国と発展

途上国との政治の発展段階の比較を政治文化の尺度をもって行なった。

政治文化論で用いられる文化概念は、一つの社会を支配している価値観・規範・信条体系・情緒形態等を意味し、これらはその社会の伝統、習慣、宗教、思想、祭式、伝承、言語、その他の共通の属性の基軸となるものである。アーモンドは政治文化をこの点でとらえ、ある社会の政治文化を住民の認識・感情・評価の中に内面化された政治システムとみる。政治文化は政治システムに対する住民の心的態度である。かれとS・ヴァーバは政治文化の理念型を未分化型（parochial type）、臣民型（subject type）、参加型（participant type）に三分類した。[13] 未分化型は地方型でもあるが、伝統的社会の初期段階にもたれる。住民は政治システムの活動や政策を直接には認識せず、また自分が国家的政治システムの一員であることを自覚しない。かれの心的世界は部族や村の環境に限られており、閉鎖的・排他的である。臣民型の人は特定の国家的権威を認識している。かれはその権威を感情でうけとめ、多分、それを誇りに思うであろう。そうしてかれは権威を正統かそうでないかということで評価する。しかしかれは政治システムの出力、行政面、すなわちその下向きの流れに主として関心をよせる。かれは政治システムに対して本質的に消極的な関係に立つ。参加型の人は全体としての政治システムに対し、また政治と行政の両構造・過程に対し自覚にもとづく態度をとることができる。かれは積極的に政治システムの活動に加わる。かれは自分の生活への政治システムの影響を敏感に意識しており、また政策の形成やその実施に影響を与えることに努めるのである。

政治文化の発展は類型的には未分化型から臣民型、参加型の道をとり、未分化型は原始段階に、臣民型は封建的伝統社会に、参加型は近代市民社会に特徴的な型態である。過渡期の伝統社会には未分化―臣民型、あるいは臣民型―参加型の混合型があらわれる。また発展途上国には未分化―参加型の混合型があらわれる。そうして近代市民社会が発展している参加型の支配的な先進国においても他の二型態をある程度含んでいるのが通例である。

アーモンドの政治文化の測定の尺度は一つの例にすぎないが、これによっても政治文化の発展が自然から文化への道をたどっていることを知り得よう。ナチス・ドイツの政治指導は野蛮・非道の状態におちこんだが、これはヒトラーとそのとりまきたちの指導者集団の文化的劣等性に大きく起因するであろう。過去の帝国日本も前近代的で残酷な政治の傷跡を残した。これはその政治システムが古代の原始宗教と封建時代の暴力重視・支配者への忠誠の強調などの古い政治文化の基盤の上に機能したことに主たる原因をもとめることができよう。明治憲法下のわが国政治文化は未分化―臣民型の濃厚な過渡的段階を示していたといえるであろう。

≪政治の社会状態への依存≫

政治システムの活動は環境である社会によって促され、その仕事はやはりこの社会にむけられ、そこに定着する。政治の歴史的成果は価値的に見れば、自由・平等・秩序・安全・豊かさ等の価値の実現と拡大とであった。これらの諸価値は人間の文化性のもたらすものであるが、人間の自然性によって確認され、定着するものである。何が自由であり、如何にして自由を実現するかをきめるのは人間の文化性のかかわるところであるが、その自由を感得するのは人間の感覚すなわちその自然性であるのである。参政権のような政治的自由は自然性を欠如するようであるが、この自由は社会的なレベルでの諸価値を実現するための手段的自由である。

さて、政治システムの機能が効果的に働き、適切な政策決定、有益で能率的な行政がなされるためにはシステムの環境をなす社会からの入力である政治システムへの要求と支持とがシステムの活動を混乱させないものでなければならない。すなわち政治システムへの要求は過大であったり、妥当範囲をこえたりしてはならず、またシステムへの支持はそのあり方、内容によってシステムを方向づける、また その量はシステムの維持に足るものでなければならない。

社会の問題が社会の場で処理され、政治システムの手を待たないですめば、政治システムの負担は当然に軽くなる。それが社会の場で処理されることに、過去の政治の成果の蓄積がかかわっておれば、政治システムへの社会からの支持はふえるであろう。具体的に事例的に説明することにしよう。

人間の社会生活に要請される秩序の種類と量はきわめて多大である。この多種莫大な秩序要請を政治システムがその大部分でも引き受けるとすれば、それは負担過重で崩壊の危機に瀕するであろう。実情はどこの国でも社会の秩序維持の大部分は社会的レベルで処理され、政府はそのごく一部分を担当するにすぎない。家庭・企業・労働組合・学校・宗教結社・社交団体等々の多様な集団が秩序維持に大きな役割を果たしている。また社会的に担われている、人間の内面的態度としての文化の社会化による効果も大きいであろう。秩序維持では政治は物理的強制力を背景にしなければなしえない、ごくわずかな部分に介入するのである。そうして政治は社会が秩序維持を大幅に引きうけてくれることによって、自己に託された秩序維持の役割を効果的に果たすことができるのである。

社会が果たす秩序維持機能は、政治システムにとってこのように重要な意味をもつが、その秩序には生物学的人間の自然面が大きく関係していることに注目されねばならない。イギリスの政治は世界の民主国家の一典型といってよいであろうが、ここに見られる社会レベルの秩序のあり方は外国人を驚かせるに足るであろう。そこでは、出る道（out）と入る道（in）、人道と車道、男と女等々の人間の自然性にかかわる基本的秩序が広く定着している。地下鉄のホームと地上を結ぶエスカレーターでは、それに乗って立ち止まっている人はキープ・ライトで、そこで早く動きたい人は左側を移動する。言論の自由は女性や老人や少数者等社会的弱者に対し社会的に擁護されている。[14] こうした社会レベルの秩序維持機能に安んじているせいか、警官の街頭パトロールは二人連れで、ピストルももたないで、悠然と歩くことですまされるのである。

自由は秩序以上に社会の土着の価値である。自由に関しては、国家は社会の自由をまず尊重して介入をひかえねばならない、つぎにあるべき自由を積極的に守り、充実させねばならない。また社会に自由が豊かにあるときはその政府は社会から支持され、誇りのまとにさえなるであろう。そうしてこの自由は大いに生物学的人間の自然と関係している。

ロンドンの街角に方形の小公園（スクエア・ガーデン）がある。その公園に植込みの中を斜めに通る道がつけられている。人はこの斜めの道を散歩するとき、人間的自然のやすらぎを感ずる。人工社会である都市の街角に公園を配し、そこに斜めの道を設計した人は、あるいはその文化感覚は卓抜な人間性の洞察に至るものかも知れない。実に斜めの小道は自然の動物のものである。直角と直線でつくった道は人工のものである。与謝蕪村のするどい観察はそれを知っていた。「ほととぎす平安城をすじかいに」とかれはうたった。平安京の条里制の直角と直線の人工の街をホトトギスは自由に斜めに横切って飛び去ったのである。ひとは権力や環境からの規制を意識しないとき大いに自由である。その無意識界においてかれは自然界の動物の一員であることを楽しむであろう。

≪政治制度の状況化≫

一七八九年のフランス革命以来世界史は不断の革命期に入った。一八四八年は労働者階級の権力や社会主義思想という現代の政治課題を伝統社会の支配体制に提示した。フランス革命でうち出された国民国家と議会制民主主義の政治制度は反動的旧体制と争いながら支配的位置を占めるに至ったが、その歴史過程は同時にまた現状に正当な不満をもつ国民大衆から制度改革を求める挑戦をうけてきた。国民国家と議会制民主主義は旧体制に勝利の祝盃をあげるいとまもなく、つぎつぎと新たな改革の対応にせまられている。こうして政治制度の状況化は現代の歴史的特徴であり、現代が政治化の時代といわれる所以である。

政治制度が状況化すると、政治の人間行動的側面が事態をリードする重要性をより増してくる。制度が安定して定着しているとき、統治指導者は政治行動の定型化された制度の活用によって制度から自動的に出てくる機能に大いに依存することができ、指導者の指導力という行動面は制度の陰にある程度潜在していることが許された。また被治者民衆も制度の安定的運用に要求や支持を対応させた。しかし制度が流動化し、状況化すると制度はその機能内容、方向づけ、位置づけ等すべて人間の行動的条件に影響されるようになってきた。指導者の指導性はもとより、民衆の要求や支持の運動が政治を動かすことになったのである。こうして政治行動の理論的把握が制度論重視の伝統的政治学にかわって現代政治学の主要課題となるに至った。そうして政治行動はすでに見てきたように生物学的人間像と切り離すことのできない関係にあるのである。

≪政治行動認識の根拠として≫

生物学的人間像の解明は政治行動の認識にいかに寄与するであろうか。これは二つの視点から考察するのが適当である。その一は人間が動物の一員として他の動物と共通に規定されている一般法則の視点からである。その二は人間が他の動物に対してもっている特性の視点からである。

第一の視点から見るとまず生物学は人間が動物の一員であることを証明した。これは政治学においてとかくひかれがちであった形而上学的人間の幻想をぬぐい去るのに役立った。

第二に人間の政治行動の動物についての一般理論からの分析が進められる。生存や種の維持についての本能的欲求の根強さ、群生、社会性、情報の伝達、社会化過程、学習、闘争、なわばり、順位制、思考等の習性と機能についての動物一般の研究から政治学は教えられることが多い。

第三には生態系の認識が深められた。人間は他の生物と一連の生態系の仲間であり、物理的自然環境と関係する。

生態系は人間の生活を規定する条件であり、また人間がそれに働きかける対象でもある。資源、大気と水の汚染、都市計画等、生態系から与えられる政策課題もきわめて多い。

他の動物に対する人間の特性の視点からすれば、人間の文化性が問題になる。人間は家畜のカテゴリに属する動物であるが、自己統制力をもつ点で他の家畜とも異なる。さらに人間は直立猿人としてのその生物的特性から文化性を発達させた。その文化は物質系・エネルギー系・情報系からなる巨大な体系をなすようになった。他の動物でも文化性をもっているが、人間は量質ともに比較を絶した文化をつくりあげた。人間の文化性は超動物的な特性となった。しかし人間特有の文化性も人間の生物学的条件に依存している。したがって文化性の側面の認識も人間についての生物学的認識によって枠づけられ、助けられるであろう。政治行動は人間の文化活動のもっとも代表的なものの一つであるが、この点で生物学的認識の影響をうけるであろう。なかでもすでにこうした影響のもっとも顕著にあらわれたのは宗教思想が政治学に与えていた影響に生物学がとって代ったことに見られる。統治者の権威の由来を神にもとめるなどはいまや笑い話でしかなくなった。

しかしこのように生物学が政治学の領域に補助的に入りこんできても、政治学の固有の認識対象である文化現象としての政治は残り、政治学による分析をまたねばならない。

≪政治行動の価値基準として≫

政治行動は主観的価値判断をふくむ領域である。この価値関係の問題について生物学的人間像は政治学にどう影響するであろうか。

価値配分の拘束　政治システムの権威者が諸価値の配分を決定するとき、生物学的人間の法則的要因については他の諸価値との間に自由選択を行なえず、重要性をおくよう拘束されねばならない。もっとも権威者の無知や利己心

による恣意的選択はありうるが。権威者は生態系の法則的事実をかれの主観的意向に関係なく重視しなければならないのである。人口系や資源系についてもこれは同様である。

生物学的法則要因が競合する場合、その要因間の権威者による選択が行なわれよう。この場合は主観的要因が入ってくるが、生物学の重要度については第一と同様である。

政治権力の核心である被治者に対する物理的強制力は主としてかれらの自然性に加えられる。これもその自然性の自由が被治者にとって重要な価値であるためである。

自然性の重視　人間の自然性の重視は二様の仕方で行なわれる。一つは人間にとってさけがたいその自然性を動物の劣等性を強調して見ることである。他はその自然性を高等な文化性を支えるものとして見ることである。たしかに生物学的人間の自然性という一つの事実は見方によってこの二つに対照的に区別されるであろう。

ところで政治体制が民主制であるか非民主制であるかによって統治者の被治者民衆に対する見方はこの二つの仕方のそれぞれに分かれることが歴史的に証明されている。非民主的政治体制では、統治者は被治者民衆をその自然性の劣等性に重点をおいて見た。奴隷制の古代国家では支配者は民衆を動物視した。農奴制の中世国家では支配者は農民に対してこのような劣等な人間観を維持した。天皇親政を本質とする専制の明治憲法体制で、支配者は愚民観をもちつづけたのであった。(15)

民主制の下で民衆の要求と支持が政治システムの出力に反映するようになると、当然のこととして統治者の民衆観は、この自然性を文化性を支える条件として評価せざるをえなくなる。すでにルネッサンスの自由都市フィレンツェで私生子はインノセント（罪なき子）とよばれ、その母と子は美しい建物の中で生活を保護されたといわれる。(16) わが国では日本国憲法ではじめて、国民は個人として尊重され、私的な幸福追求の権利を公的に承認され、健康で文化的

な最低限度の生活を保障されるに至った。もっとも現在のところこれらはまだ条文の域をあまり出ていない。

情緒面の評価　人間の感覚は外界から情報をうけ入れ、外界に対して知性と感情の二面で反応する。人間の自然性の評価はこの二つのものを含むが、政治行動においては、感情面、すなわち情緒的側面により力点をおいてとりあげられてきた。それは人間の行動の動機づけとして知性より情緒の方がより強く多くの人びとに作用するからである。

伝統社会は情緒性の強い社会文化をもっていた。血縁的結集が強く、宗教的雰囲気が濃厚であったことも、このことと関係があるであろう。その政治システムは伝統社会のこの強い情緒性の安定の上に支えられ、停滞していた。そこでは支配者への民衆の奉仕や犠牲は民衆の情緒の喚起によって補償されていた。「義は君臣、情は父子」は君主と臣下の身分的な命令・服従関係のきびしさを父子の情愛関係でつつみこもうとしたのである。伝統的な政治体制を維持するための民衆の情緒に向けての教化対策、次世代に対する社会化対策も大いに留意された。

政治の民主化革命ののち、統治者と民衆との公事である政治の面では情緒的関係は稀薄になっていく。政治に知性或いは合理性が強く要求されるようになる。[17] しかし伝統の保守主義や知性のおくれた民衆にはなお政治における情緒性の支配が見られる。またコミュニケーション技術の発達によって、それを利用した民衆に対する情緒的操縦はむしろ大規模になり、多大の効果もあげうるようになった。

情緒対策の一種に情操教育がある。情操は感情が知性で方向づけられたもので高等感情をさす。アリストテレスや孔子が音楽による品性の訓練をもとめたのはこれであった。

統治者の選定　生物学的人間像は統治者の選定制度との関係で政治体制を評価する基準要素としての重要な意味をもってくる。伝統的社会の専制の体制では統治者の地位は血統によって継承される世襲制がひろく行きわたってい

た。これに対し近代社会の民主制では統治者の地位は一般民衆の選挙によって任命される選挙制がとられる。世襲制は身分制の政治文化が基底にあり、統治者の血統は貴種として尊重される。世襲制の場合、統治者はしばしば幼年や身体欠陥者で摂政をおかねばならず、あるいは無能・暴虐で政治の乱れが生じた。平安時代、藤原氏は自分の娘を宮廷に入れて、皇子を生ませ、かれを幼年において天皇の位につけ、自分は摂政となって権勢をふるうのを常とした。世襲制はまた血統を絶やさないために統治者はハーレムを必要としたのであった。世襲制の王が一方では、神的権威の後光を背負いながら、他方ではこのような人間の自然性に露骨に規定されていることは制度の大きな皮肉であるといわねばならない。そうして専制下の統治者の選定には被治者民衆の意向はほとんど考慮されない。民主制の選挙制では民衆の代表として統治者が選ばれる。この選挙が合理的に進められるならば、人間の自然性においてすぐれていることが選別の主要な要素として入ってくるであろう。健康・年令・欲望の自制力・理性的能力等がこれである。欲望の自制力は候補者の経歴を見て、誘惑にまけず、行動に調和があることで判別されるであろう。しかし実際は選挙民の人間関係・利害関係・情緒的反応などがこの合理的選挙過程の直線的な実現を許さない。ここに選挙民の人格性の弱さが見られる。

選挙制が人間のよき自然性によって統治者をえらぶことができても、所詮、人間は善にもなり悪にもなる欲望のルツボであることには変りはない。ことに権力の座を求めるような人物は攻撃的性格が強いから悪の成果を生み出すことも大いにある。腐敗の可能性をもたない権力などいまだかつて存在したことはなかった。そこでよき正しい政治のために統治者の行動の抑制装置と促進装置とを制度化することを要する。抑制装置とは悪に傾くことを抑える役目をもつ。促進装置とは統治者が理性的政治指導をしやすいようにその自由と権限を守る役目をする。

さて生物学的人間像は人間の存在性の平等観の普及・貫徹を要請するであろう。旧体制で統治者は身分と地位の差

別や特権を享受してきたが、この平等観はその解消を志向すると考えられる。これら非合理的な特権の解消にともなって、統治の機能主義原理に立ったメリットシステムの導入、普及が期待されるのである。

他方、社会科学の自然科学的充実は、一般に政府と民衆との対立関係において政府の側に支配力の増大をもたらす傾向がある。[18] 生物学的人間像の政治学への侵透は非民主的効果をよぶおそれもあるだろう。

生物学的人間像の限界　生物学的人間像は、ことわるまでもなく政治学的人間像を決定するものではない。これまで政治学の立場から生物学的人間像を評価してきたのは、それが政治行動の基礎部分をいかに広く構成しているか、またそれがいかに政治学的人間像の中に入りこんできているかについてであった。マリノウスキーは文化の生物学的基礎を重視したが、しかも文化の生物学的決定論をきっぱりしりぞけ、生物的自然に対する人間的文化の卓越を強く主張したのであった。[19]

一般的にいって自然的条件は人間生活の与件として広く、包括的に人間行動にかかわり、そのあるものはたしかに法則性をもってそれを決定する。しかしそのことは人間の文化的対応を決して拘束するものではない。文化的対応は相当な自由度と選択の幅を与えられており、その範囲内では文化の条件が行動を決定するのである。そうしてこのような文化行動の蓄積が他の生物に対して人間の自然適応の優越性をもたらしたのであった。政治行動は文化活動の統合作用として重要な役割を果たしてきた。それは権力・権威・支配・服従・調整等を主要行動としてふくみ、情緒・価値・信条・意見・思想・規範等主観にかかわる要素によって生み出されている。そして政治行動の成果は定型化して制度となり、発達した情報コミュニケーションによって空間的に、また世代間に伝えられる。これらの領域の解明に生物学的人間像は大きな助けとはなるが、それには限界がある。政治現象の解明には直接、社会的・文化的要件がかかわるのである。

しかし公害の多発や開発による生態系のいちじるしい撹乱が起ると、自然が直接、政治の課題となってくる。この状況では文化装置は不適応の様を呈し、自然のきびしさがあらわに迫ってくるわけである。資源と人口問題についても同様である。この政治の課題は二つの源泉から出てくる。一つは自然環境自体からである。いま一つは環境不適応を生み出した文化装置、すなわち人為的条件からである。例えば公害による生存の危機は産業政策が生み出したごときである。この両源泉からの課題はともにきわめて重大なものである。こうして文明の点検がいまや政治学の課題になってきたのである。

(1) W. J. M. Mackenzie : Politics and Social Science, p. 69.
(2) Human Nature in Politics, 1924, Part 1.
(3) Ibid.
(4) フロイト著・菊盛英夫訳「精神分析入門」一九六七年、二三四―五四頁。
(5) 土居健郎「甘えの構造」（一九七二年）、はこの日本的特性を興味深く追究している。
(6) T. W. Adorno & others : The Authoritarian Personality, 1950.
(7) H. McClosky : Conservatism and Personality, 1958. American Political Science Review, vol. 52, pp. 27—45.
(8) D・イーストン著・岡村忠夫訳「政治分析の基礎」一九六八年、六七頁。
(9) 同上書八八頁。
(10) G. Almond : Comparative Political Systems, 1956, pp. 33—5.
(11) G. Almond : A Development Approach to Political Systems, 1965, pp. 195—203.
(12) M. Palmer & others : The Interdisciplinary Study of Politics, 1974, p. 77.
(13) G. Almond & S. Verba : The Civic Culture, 1963, pp. 17—20.
(14) ロンドン・ハイドパークの一角にあるスピーカーズ・コーナーでは意見をもつものはそれがどんな意見でも自由に発表す

ることができる。政治と社会に対する多くの不満がそこで主張され、人々はきいている。またヨーロッパ社会では女性はノーという意思表示ができさえすれば男性の暴力から大体において守られるといわれる。言論の自由の原点がここにあるようである。

(15) 旧体制の政府は被治者民衆の多数を知性が低く、感情に動かされやすい劣等的存在と見なした。これは民度が低いと表現された。これが愚民観である。市民的自由権を制限した治安法制や労働運動の抑圧法制にこれが前提されている。一九二五年の普通選挙法で選挙運動にきびしい制限が設けられたのも一つは愚民観からであったといえよう。

(16) 羽仁「都市の論理」二二二頁。

(17) ケネディ大統領が就任後、アイルランドのケネディ家の郷里をたずねたが、アメリカ世論はこれを「センチメンタル・ジャーニィ」とよんだ。

(18) 自然科学のもたらす強力な技術的成果は本来中立的であるが、支配・服従の人間関係で起用されるとき、どうしても優勢な支配者の手段となりやすい。心理学の発達やコンピューターによる情報処理技術の進歩はそうした不安と警戒がもたれてきた。行動科学についてもその多少の反民主的傾向が B. Crick らのイギリスの学者によって指摘されている。Austin Ranney : Essays on the Behavioral Study of Politics, 1962, pp. 28—9.

(19) Malinowsky : op. cit., pp. 88—9.